

人生を聞くということ

徐 玉子

「あなたは私の話を全部聞いた。私がどんな気持ちでその子(黒人兵士との間に生まれた女兒)をアメリカに送ったのか、そしてこれまでどのように生きてきたのか。それを全部あなたの論文に書きなさい。私には書けないから、あなたが書きなさい。」

これは、Sさんが涙ながらに私の手を両手で握り締めて語った言葉である。

私がフィールドワークを行ったのは在韓米軍基地周辺の「基地村」と呼ばれるところである。基地村は、日本植民地からの解放とそれに続く朝鮮戦争期における米軍の台頭とともに、米兵の日常的な必要に応じる物品の調達や Rest&Recreation のためのサービスを提供するためにつくられた。Rest&Recreation は、字義的には「休息と休養」であるが、実際に基地村では「酒と女」と同義である。韓国の多くの人びとにとって、基地村という言葉は「国民的自尊心」を傷つける否定的な意味を持っている。それは、基地村で米兵に対して主に売買春に関わる性的サービスが提供されていることによっている。このことが圧倒的な力を背景に優位に立つアメリカと、それに依存して生計を立てるしかない基地村の韓国人、特に米兵を相手に「体を売る」しかない韓国人女性の存在を想起させるからである。



写真1 平澤駅周辺で開催された米軍基地拡張に反対するデモ



写真2 基地村に掲げられた横断幕。米軍基地拡張反対の社会的な雰囲気とはまったく異なる

朝鮮戦争以後、戦争で夫を失った女性や両親を亡くした子どもたちは生計を維持するために基地村に入り、最後の手段として売春婦になることを選択した。彼女たちは一般的に「洋公主 Yanggongju」という社会的な烙印と非難の下で生きてきた。「長幼有序」の礼儀が重視される韓国社会で、道を歩いている「洋公主」に対して村の子どもたちが石を投げつけたり、唾を吐いたりしたという証言があることから、彼女たちに押された烙印がどれほど強いものであったかが推測できる。彼女たちは社会の秩序の外に追い出され、社会の成員権を奪われたのである。それは、彼女たちが不特定多数の男性を相手に「体を売る」ことに起因するが、それに加えて売春の相手が異民族の男性であることがより強く烙印を押させたと言える。



写真3 基地村のクラブ街のネオン

しかし、その一方で彼女たちは、「ドル稼ぎの産業力軍」あるいは「民間外交官」と称され、「米軍慰安婦」として良質のサービスを提供するように、韓国政府から半ば公然と奨励された事実がある。戦後、疲弊した韓国経済を発展させるために外貨獲得がひとつの重要な要とされるなかで、女性たちが米兵を相手に稼ぐドルは「元手なし」の外貨獲得の手段とされた。実際、韓国の経済発展はこのような方法による外貨獲得にその基盤を置いていると言っても過言ではない。さらに、基地村の売春女性の役割はドルを稼ぐだけにとどまらない。ニクソン・ドクトリン（1969年）によって在韓米軍の縮小が実行されると、米軍の継続的な駐屯が可能な環境をつくるために「基地村浄化事業(1972-1976)」が実施された。具体的な浄化の中身は基地村の売春女性たちの徹底的な性病管理にあった。それによって基地村の売春女性たちは、徹底的な性病管理のもとで、白人と黒人を差別しない良質のサービスを提供する「民間外交官」にならざるをえなかった。このように、基地村の女性たちの身体は国家の利害によって徹底的な管理の対象になったのである。

一時は基地村の「産業力軍」として、「民間外交官」として褒め称えられていた女性たちは今や「忘れられた」存在になっている。しかしながら、基地村で年老いて一人暮らしをしている彼女たちに付きまとう烙印だけは今もなお現在形である。

私は戦後から1980年代まで基地村で「米兵相手」をした、韓国人女性たちのライ

フヒストリーを収集した。彼女たちは、調査時点で60歳代から70歳代になっていた。活動家として活躍している金蓮子氏は、売春女性について次のように述べる。「私は25年間基地村で働いたが、私たちはつねに忘れられた、いや、忘れられるべき存在であり、見えてはならぬ存在であった」そのような「忘れられ、見えてはならぬ存在」に会い、話を聞くことが私のフィールドワークのねらいであった。このフィールドワークは「無知の世界」にたどり着き、今まで不可視化されてきた人々に出会い、語らない人に話かける作業であった。最初、元売春女性たちは、「昔の話をしたくない」、「それを思い出そうとしたら頭が痛くなる」、「全部忘れた」、「思い出したくない」という言葉でインタビューを拒否した。しかし、顔をあわせる時間がつみ重なるなかで、女性たちは徐々に自分のことを話し始め、最後には「私の話を聞いてくれてありがとう」と言ってくれた。そして、話を聞いた私にきちんと「書く」という応答を要求した。私にとって、フィールドにおいて「聞く」ということは、聞いたことを「書く」ことの意味とその責任を強く実感させる作業であった。

*徐玉子さんは、2012年3月31日に京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程単位認定取得退学されました。